特集1｜続・生き続ける建築

9

中村與資平

Yoshihei Nakamura

1880年、静岡県に生まれた中村與資平は、三高を経て、東京帝国大学建築学科に進む。
卒業後は、辰野葛西事務所に入所し、第一銀行韓国総支店を担当する。
その設計を終えると、監理のために韓国・ソウルに向かった。
5年後、建物は無事に竣工したが、日本には帰らず、辰野葛西事務所を辞めて独立。
以降、約10年間にわたり朝鮮半島で活動し、主要な都市には必ず彼の建物があると言われるほど、多くの作品を残した。
しかし、突然に事務所を後輩に託し、ほぼ1年間をかけて欧米を旅行し、ドイツの科学教育に影響を受けて帰国する。
そして中村工務所を開設し、関東大震災の影響からRC造の設計に力を注ぎながら、東京と静岡を中心に幅広く活躍した。
その後、戦争により浜松に疎開し、晩年は科学教育を進める教育者として名を残した。
今号は、日本以外を拠点に活躍した「海を渡った建築家」のひとり、中村與資平の生涯を振り返る。

［出典：『営業経歴』］

浜松銀行集会所 正面矩計［部分、1929］
［所蔵：浜松市立中央図書館］

中村與資平──世界を見た日本人建築家｜西澤泰彦｜Yasuhiko Nishizawa

国の登録文化財制度が始まった1996年、静岡県で最初に登録文化財となったのは、静岡市役所本館（静岡市庁舎）［1934］であった。その設計者・中村與資平が、この建物と相前後してかかわった静岡県庁本館（静岡県庁舎）［1937］、静岡銀行本店（三十五銀行本店）［1931］、浜松銀行協会（浜松銀行集会所）［1930］、豊橋市公会堂［1931］も次々と国の登録有形文化財になった。

朝鮮銀行本店──人生を決めた最初の仕事

中村與資平は、1880年、静岡県長上郡天王村（現・浜松市東区天王町）に生まれる。第三高等学校を経て、1902年、東京帝国大学建築学科に入学する。同級生に、日本国内で著名建築家として名を馳せた人物は、いなかった。これは、後述する。
1905年、大学を卒業した中村は、辰野金吾が後輩の葛西万司と共同で主宰していた辰野葛西事務所に入所する。ここで、最初に与えられた大きな仕事が、第一銀行韓国総支店の設計であった。これが、後の彼の人生を決定づけることとなる。
1907年、その設計が終わると彼は、工事現場のある韓国・漢城（京城、ソウル）へ渡る。辰野の代理者として、監理のためである。1911年8月、朝鮮銀行本店と名前を変えていた建物は、1912年1月に竣工した。この間、日本による韓国の保護国化と植民地化があり、この建物は、韓国銀行本店、朝鮮銀行本店と名を変えていた。

京城（ソウル）に建築事務所開設

朝鮮銀行本店の竣工後、中村は日本へ帰らなかった。辰野葛西事務所を辞し、京城に中村建築事務所を開設した。と同時に、朝鮮銀行の建築顧問になった旨が、後に編集された『営業経歴』や戦後、彼が書き遺した手記［いずれも浜松市中央図書館所蔵］に記されている。当時の建築学会（日本建築学会の前身）の名簿を見ると、1912年の所属欄では「朝鮮銀行」と記され、1914−16年、1920年の各名簿の所属欄では「朝鮮銀行技師」と書かれている。1921年になってやっと「中村建築事務所」と記されている。これらを勘案すると、中村は、事務所開設の1912年当初、朝鮮銀行に技師として雇われながら、個人事務所も経営していたというのが実態だったと私は思う。
朝鮮銀行にかかわる肩書きの効力もあり、1910年代後半、銀行はもとより、教会、公会堂、学校、新聞社という具合に、次々と設計の依頼が舞い込むようになった。彼が京城に事務所を開設していた時期（1912−22年）に設計した建物数は、住宅を除いても朝鮮半島に40件あった。この中には、京城での社交場となった京城公会堂［1919］や朝鮮クラブ、韓流ドラマとして人気を博した「冬のソナタ」に登場する京城中央学校［1917］もあった。また、銀行については、朝鮮半島の10都市に合計20件の設計を行っている。これは、当時の朝鮮半島の主要な都市に行けば、必ず中村の設計した銀行が建っている、という状況を生み出す。

大連に進出

このような彼の活動を支えた事務所の番頭役が、岩崎徳松［1889−1924］であった。岩崎は、1908年に福岡県立工業学校を卒業し、文部省に入って、九州帝国大学の新築工事に従事し、その後、韓国に渡り、韓国税関釜山出張所員として、釜山港桟橋工事に従事していた人物であった。中村は、朝鮮銀行大阪支店［1915］の新築工事では、岩崎を大阪に派遣した。1917年、中村が大連に出張所を開設した時、大連に送り込まれたのが岩崎であった。

朝鮮銀行本店｜上──竣工当時［出典：『営業経歴』］／下──2009年現在［写真提供：筆者］
漢城（京城、ソウル）の中心地に建てられた2階建て（一部3階で）のルネサンス様式の建物。起工時には第一銀行韓国総支店だったが、定礎から3ヵ月後の1909年10月に韓国銀行本店となり、工事途中の1911年8月には朝鮮銀行本店となった。構造はRC造の床を石造と鉄骨レンガ造の柱で支える混構造。戦後は韓国銀行本店として使われていたが、現在は、韓国貨幣金融博物館に転用され、銀行業務は後方の高層棟に移転している

朝鮮銀行大連支店｜上──竣工当時［出典：『営業経歴』］／下──2009年現在［写真提供：筆者］
大連の中心地である大広場（現・中山広場）に面して建てられた鉄骨レンガ造の建物。前面にはコリント式のジャイアント・オーダーが6本並ぶ。内部は、営業室部分が吹抜けになっている。1990年代に後方に新館を増築し、この建物は2001年、国家重点文物保護単位（国の重要文化財に相当）になった

京城公会堂｜当時は長谷川町と呼ばれた京城(ソウル)の中心地に1919年に竣工した公会堂。中に座席数765席の講堂がある。1935年に京城府民館が竣工するまで、日本人の社交場でもあった[出典:『営業経歴』]

朝鮮銀行群山支店
上――竣工当時:当時の群山は、朝鮮半島西海岸に位置する港町で、米の積み出し港として著名であり、かつ、仁川と共に朝鮮半島と中国大陸とを結ぶ交易の拠点であった。建物は、レンガ造2階建てで、その設計はアントン・フェラーが担当した結果、セセッションの外観となった。特に、寄棟屋根の途中に付けられた櫛形の屋根窓は、ドイツで19世紀末から20世紀初頭に建てられた建物によく見られる形態であり、さらに、屋根全体をまわる細長い屋根窓によって屋根を二分し、上部を宙に浮かす手法は、新しい建築形態を提案したものとして注目される。建物は、戦後、酒場などに使われたが、1980年代後半から空き家となっていた。しかし、2009年から群山市による修復事業が始まった[出典:『営業経歴』]
下――棟札:2009年7月に行われた建物の調査において、屋根裏で発見された。設計者に中村與資平の名前が見える。この棟札から、施工は清水組(現・清水建設)京城支店が請け負ったことが判明した[写真提供:韓国圓光大学校建築史研究室/協力:成均館大学校尹仁石教授]

大連出張所は、朝鮮銀行大連支店[1920]の新築移転に対応したものだった。しかし、朝鮮銀行大連支店が竣工しても大連出張所は存続した。彼の真意は、大連を拠点に満鉄沿線での活動を展開することであったと私は考えている。そのため、大連出張所では人員増強が行われた。1918年、岩崎を京城の事務所に戻し、それまで陸軍技師を務めていた久留弘文[1890-1933]を所長に迎える。さらに、この年に大学を卒業したばかりの宗像主一[1893-1965]を出張所員として雇った。しかし、大連出張所が担当した設計監理の物件は、朝鮮銀行の大連、長春の支店、横浜正金銀行の長春支店、奉天と開原の公会堂、だけである。

一方、京城の事務所では、チューリヒ・ポリテクニクム(Zurich Polytecnikmu、現・スイス連邦工科大学チューリヒ校(ETH))での修学経験のあるオーストリア人アントン・フェラー[1892年生まれ、没年不詳]が住み込みの所員として雇われた。フェラーは、セセッションという新しい建築様式を持ち込んだ。彼が設計を担当したと確認できる天道教中央教会[1921]、朝鮮銀行群山支店と大邱支店[いずれも1922]、開原公会堂には、セセッションの意匠が施されている。

逆境からの再出発――東京移転

そのような状況下で、中村に転機が訪れる。1920年12月25日、京城の事務所が、フェラーの失火によって全焼してしまう。失意の中で中村が次に起こした行動は、活動拠点の移転、すなわち、新しい建築事務所を東京に開くことだった。さらに、京城を引き払うにあたって、世界一周旅行をすることを考え、また、京城の事務所は岩崎徳松に譲り、大連出張所は宗像主一に譲った。

中村は1921年3月25日、横浜を出発して、シアトルに向かい、アメリカを西から東へ横断し、大西洋を渡って、同年6月には、ハンブルクに到着。その後、ヨーロッパをあちこち旅しながら、オーストリアで、フェラーを両親のもとへ返し、1922年2月11日には、日本に帰国。同年4月、東京に中村工務所を開設した。工務所と名乗ったのは、設計部と工事部からなるいわゆる「ゼネコン体制」を確立したためである。

結果として、この東京移転が当たった。最初の仕事は、当時、東京市が進めていた小学校校舎の鉄筋コンクリート造化に協力することだった。東京市は、岡田信一郎などにモデルとなる校舎の設計を依頼していた。その仕事が中村にも与えられ、番町小学校[1924]を設計する。そこで彼は、校舎にシャワー室と日光浴室をつくった。彼は、世界一周旅行の中で、ドイツの学校を見学した際、校舎にシャワー室と日光浴室があったのをもとに、この提案を行った。衛生状態の悪い居住環境に置かれた子どもは多く、そのような子どもの健康を確保するため、東京市は中村の提案を受け入れ、その後、東京市が建てていく小学校校舎にはシャワー室と日光浴室が設けられた。日光浴室は脚気対策の意味もあった。

1923年9月1日、東京など関東地方は未曽有の震災に見舞われた。関東大震災である。官に職を得なかった中村が、震災復興事業に直接かかわることはなかったが、民間に建築事務所を開く建築家として、彼が民間の復興に果たした役割は大きい。彼が、東京に事務所を開いていた時期、彼の設計した建物のほとんどは鉄筋コンクリート造であった。関東大震災直後から、公共建築だけでなく、銀行やオフィスビルといった民間の建築にも鉄筋コンクリート造の建物が増えていくので、それは当然なのだが、今日の建築家が鉄筋コンクリート造の建物を設計するのとは状況が違う。中村は大学時代に鉄筋コンクリート造を習っていない。理由は単純明快で、彼が大学を卒業した1905年、日本には鉄筋コンクリート造の建物がほとんどなかった。彼が就職した辰野葛西事務所では東京駅の設計が行われていたが、辰野金吾は、生コンが固まることへの懐疑心から、東京駅をレンガ造で設計したと伝えられている。中村が就職した時代は、そんな時代であった。彼にとって、鉄筋コンクリート造の知識、技術は、独学に近い。

この努力が功を奏して、中村工務所の業績は順調であった。特に、銀行の設計依頼が多数あった。東京時代の中村工務所、中村與資平建築事務所が設計した物件のうち、住宅を除く物件は59件あり、そのうち、18件は銀行であった。

故郷に錦を飾る

この時期、彼の活動のもう一つの特徴が、活動範囲である。前出の59件のうち、34件の所在地は東京とその周辺で、25件の所在地は静岡県である。東京に拠点があるので、東京の物件が多いのは当然であるが、それに匹敵する数の物件が静岡県に建てられた建物であるのは、彼が静岡県出身であるからに他ならない。静岡県庁舎の実施設計を始め、静岡市庁舎、静岡市公会堂[1935]、浜松市公会堂[1927]、静岡県に隣接する豊橋市公会堂という具合に公共建築の設計に携わり、また、三十五銀行の本店や各地の支店、遠州電気軌道旭町駅[1929]、静岡県特産の茶を扱う組合の建物(静岡県茶業連合会議所)、という具合に幅広く設計していく。東は三島から、富士、清水、静岡、焼津、藤枝、島田、掛川、浜松、そして西は豊橋まで、東海道に沿う10都市に、彼が設計した建物が建っていた。これは、京城に拠点を置いていた時期、朝鮮半島の主要な10都市に彼の設計した建物が建っていたのと同じ現象である。

1944年、彼は建築事務所を閉め、故郷に戻り、戦後もそのまま郷里で余生を送った。その中で、1952年、公選制度に基づいて行われた静岡県教育委員の選挙に立候補し、当選した。かつて旅したドイツで見た科学教育を日本で実践すべく教育委員になった。1956年には教育委員会副委員長になっている。地元の静岡県、特に浜松市では、建築家としてではなく、教育家としての彼の名声が高いのは、このためである。1984年、浜松で中村與資平の調査をしていた時、「與資平さんは、学校の先生でしょ」と声を掛けてくれた方があったが、それは、彼が教育委員を務めたことに起因していた。

海を渡った建築家――1905年5人組

さて、冒頭で「同級生に、日本国内で著名建築家として名を馳せた人物は、いなかった」と書いたことを説明しよう。在学期間の半分近くが日露戦争時期であったこの学年は、それがその後の歩みにも現れている。岩井長三郎は大蔵省から韓国に設立された統監府に派遣され、その後、朝鮮総督府技師になる。国枝博は、韓国政府に設けられた度支部(たくしぶ)建築所の技師となり、その後、岩井と共に朝鮮総督府技師となる。田村鎮は陸軍技師として樺太守備隊付となり、樺太に赴く。横井謙介は、住友臨時建築部を経て、1907年、南満洲鉄道に入社し、大連に向かう。1905年、東大建築学科卒業の13人のうち、海外に渡った者は5人。彼らを1905年5人組と呼ぶ。1985年以来、私は、彼らのことを「海を渡った建築家」と呼んでいる。日本以外の地に拠点を置いて活動した日本人建築家である。彼らに共通することは、海外に拠点を置いただけではなく、日本国内での活動経験が短い状態で海外に赴いていることであり、かつ、日本国内での官歴に乏しいことである。その結果、官尊民卑の日本にあって、彼らの活動は、日本国内では記録に残りにくかった。

1905年5人組のうち、横井と田村は1942年に、岩井と国枝は1943年、それぞれ他界した。中村だけが長生きし、1963年に没した。中村は、1942年、田村が亡くなった時には『建築雑誌』に追悼文を書いた。植民地に暮らし、震災と戦災を経験し、復興と高度成長を見た中村の人生は波乱万丈であったと思うが、彼の人生はその縦糸だけでなく、私費を投じた世界一周旅行を横糸とし、そこに連なる見聞が縦糸に連なる経験と重なり、1930年代には建築家として、1950年代には教育家として大成したと私は思う。

にしざわ・やすひこ――建築史家・名古屋大学環境学研究科准教授/1960年生まれ。
博物館明治村評議員を務め、歴史的建造物の保存・再生・活用にもかかわる。2009年、日本建築学会賞(論文)受賞。

横浜正金銀行長春支店｜2010年現在。当時、満鉄長春駅周辺に設定された満鉄鉄道附属地の中心街だった日本橋通に面して建てられた建物。中村建築事務所大連出張所の所長を務めた久留弘文と所員の宗像主一が設計を担当した。施工は、大連に拠点を置く高岡工事部が請け負った。これが縁で、高岡工事部責任者の高岡又一郎は、久留と共に高岡久留工務所を興した。横浜正金銀行は、満鉄沿線で活動する日本人商工業者のために、中国の貨幣状況に合わせた銀本位の横浜正金銀行券(鈔票)を大連支店で発行していた。朝鮮銀行が金本位で日銀券と等価の朝鮮銀行券を発券していたことから、日系銀行の間で、銀行券の流通競争が演じられるという奇妙な現象が起きた[写真提供:筆者]

天道教中央教会｜2009年現在。天道教は、朝鮮半島在来の民間信仰に、仏教と道教が融合して成立した宗教である。この建物は、その総本山として第3代目の代表を務めたソン・ビョンヒ(孫秉熙)が計画し、中村建築事務所が設計したもの。建物の後方部分には、折り畳み椅子で400席が並ぶ講堂がある。フェラーが設計を担当したと伝えられる[写真提供:筆者]

1

浜松銀行集会所

（現・旧浜松銀行協会（木下恵介記念館））

竣工年：1930年

所在地：静岡県浜松市中区栄町3-1
規模：地上2階｜構造：RC造
浜松市指定有形文化財

2

3

4

5

6

1――エントランス：建物の北側に開く玄関は、床をモザイクタイルで仕上げ、玄関扉上部には幾何学模様のステンドグラスが嵌まっている。床のモザイクは、浜辺に打ち寄せる波と松並木を連想させるデザインになっている。ちなみに、浜松では、市章を始め、波や浜、松を使ったロゴが多いといわれる

2――北面全景：建物はRC造2階建てであるが、2階にある講堂の天井高を確保するため、屋根も高くなっている。そのため、建物正面の形態も、右側のパラペットが高くなり、その不自然さを補うため、瑠璃色のスペイン瓦を乗せた軒屋根をつくり、左側は、小さなアーチの連続するロンバルディアバンドをまわした

3――エントランスホール：来訪者は、このエントランスホールから各部屋に分かれていく。正面奥（写真右手）には娯楽室、談話室、食堂、ホールに入って左手には2階に上がる階段、右手には手形交換室と事務室があった。ホールの腰壁には外装仕様のタイルが張られていることから、中村はここを中庭（パティオ）に見立てて、屋外の扱いで設計したと考えられる

4――2階のホールから見た階段：手すりと腰壁は人造石研ぎ出し仕上げで、特に手すりはよく磨かれており、黒光りしている。腰壁に開けられた開口は、階段と2階ホールを一体化する工夫であると思われる

5――2階展示室：当初は喫煙室と称された部屋で、正面の窓を開ければ、車寄せ上部のバルコニーに出ることができた。バルコニーには鉄製の細い手すりが付いていたが、戦中に供出させられたと伝えられる

6――かつての球戯室（写真奥）と囲碁室（写真手前）を隔てる壁に埋め込まれた飾り窓：木製に見えるがコンクリート製で、表面に茶色の塗装を施して木製に見せている。図柄の由来は不明だが、抽象的幾何学模様と具象的模様を組み合わせた図柄は珍しい。市松模様に葉を掛け合わせて、「はままつ」と読ませる意図があるかもしれない。あるいは、ヤシの葉が温暖な浜松を意味し、スパニッシュ様式の外観に合わせた感もある

1

豊橋市公会堂

竣工年:1931年

所在地:愛知県豊橋市八町通2-22
規模:地上3階|構造:SRC造
国登録有形文化財

2

3

4

1——南面全景:公会堂が左右対称の正面を持つことはよくあるが、正面中央に大階段を設けて、来訪者を2階に誘導する手法は、日本の公会堂としては少ない事例。伊藤晴康氏(豊橋創造大学短期大学部教授)らの研究により、別府市公会堂やアメリカのサンアントニオ公会堂との類似点が指摘されている。正面中央に5連の半円アーチを設けていることから、ロマネスク建築の影響を受けているという指摘が多々ある。正面のアーチを支える柱には、当時流行していた中村式グラニットと呼ばれるきれいな人造石が使われたが、外壁補修工事により、今では見ることができない。公会堂の建設は市制25周年記念事業であり、ドームの周囲にはばたく鷲は、豊橋市の発展を象徴している

2——3階席のホワイエにある窓から玄関上部の連続アーチ越しに正面の通りを見た風景:正面を左右に走る道路は国道1号線で、中央を路面電車が走る。国道1号線とT字に交わる写真中央の道路は、大手通と呼ばれ、旧城下町の頃から1950年代まで豊橋の市街地を南北に貫く幹線道路。公会堂はその道路の正面に建てられ、豊橋市にとって記念碑的存在でもある。竣工時には、大手通を通ってきた路面電車が公会堂の正面で国道1号線に曲がって入っていた

3——貴賓室:3階東南角に位置し、今でも窓から市街地が一望できる。集会室(ホール)との位置関係から、貴賓室の位置がここに定まったと思われるが、それを利用して、市外から招いた賓客に当時の豊橋市街の様子を紹介する意図があったと考えられる

4——エントランスポーチ:建物正面の2階に設けられたエントランスポーチ。写真左手の大階段を上ってきた聴衆(観客)は、ここを通って写真右手の扉の奥にあるホワイエに入る。建物正面に連ねたアーチに合わせて、交差ヴォールトの天井としているところに、中村の西洋建築に対する理解度の深さがある

静岡市庁舎

（現・静岡市役所静岡庁舎本館）

竣工年:1934年

所在地:静岡県静岡市葵区追手町5-1
規模:地上4階、塔屋｜構造:RC造
国登録有形文化財

2

3

4

1——3階市議会議場:正面は議長席、その左右に市長など市役所幹部の席を置き、手前は議員席が並ぶ。これら座席上部を吹抜けとし、吹抜けを三方から取り囲むように4階に傍聴席を設ける。議員席背面が建物正面にあたり、窓にステンドグラスが嵌まる。議長席まわりの腰壁や天井の梁を意匠化したデザインは、チューダー様式に似せている

2——北面外観:市庁舎の正面であり、中央に塔を建て、左右対称の外観となっている。中央部分は4階建てで、2階は貴賓室、3階と4階は議場になっている。左右の翼部は3階建てである。薄いクリーム色のタイルを張った外壁、塔のデザインが温暖な静岡の気候に合っているという指摘や、それが南欧のイメージを醸し出しているという指摘もある。塔の先端の高さは、地上135尺(約40.9m)ある

3——貴賓室:2階に位置し、写真右手は玄関車寄せを兼ねたバルコニーで、外に出ることができる

4——市長室:竣工時には市長公室と呼ばれ、市長の応接室の役割を果たした部屋で、この隣室が市長の執務室であった。議場と同様にチューダー様式の内装が施され、写真正面の暖炉には大理石が使われている。カーテンボックスの飾りに旧静岡市の市章が入っている

1

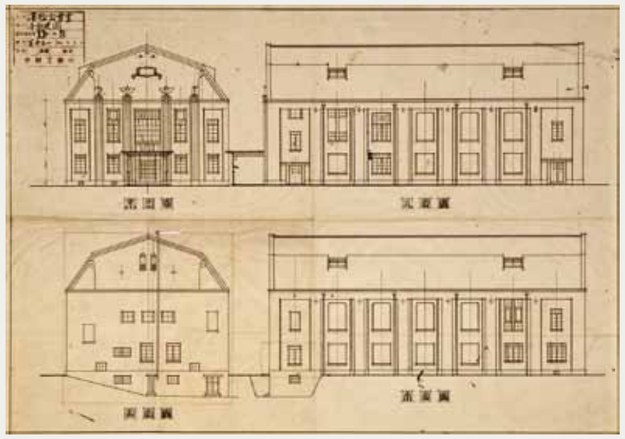
ドキュメント・ファイル | Document Files

浜松市公会堂

1927年に竣工したRC造の公会堂。敷地は浜松銀行集会所の近くであった。正面に並ぶ円柱は、豊橋市公会堂でも用いられている中村式グラニットと呼ばれる人造石。柱の上に載る鳩は、彫刻家・朝倉文夫の指導でつくられたもの。工事直後につくられた工事概要書では、ネオバロックを意味する近世復興式と書かれているが、腰折れの切妻屋根を大きく見せる手法は、フェラーが採った朝鮮銀行群山支店の設計手法に通じる部分がある

1——外観[出典:『営業経歴』]
2——各面建図[所蔵:浜松市立中央図書館]

1



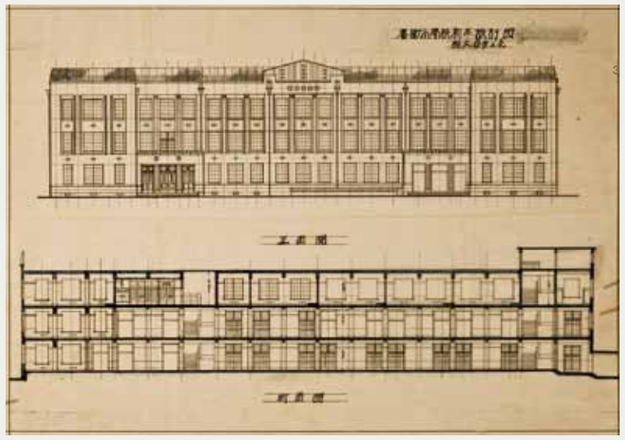
2

番町小学校

東京府が1870年に開設した最初の小学校の6校のうちのひとつ。1911年竣工の木造校舎が1922年7月に焼失したため、RC造で校舎を新築することになり、東京市は、設計を中村與資平に依頼。彼は、校舎の日影図を描いて校庭の日照を考えながら校舎の形態や位置を決めていった。また、シャワー室や日光浴室の設置を盛り込んだが、シャワー室は、学校の教員側からの要望もあって、意見が一致していた。「設計技師中村工学士は、学校建築に対して形式よりも実用に重きをおかれたようであった」と後に賞されている。工事は、1923年1月に起工したが、竣工直前に関東大震災に遭い、1924年3月に竣工した。震災で工事は遅れたが、被災したわけではなかったため、逆にRC造校舎の耐火、耐震性が認められる結果となった

3——シャワー室[出典:『営業経歴』]
4——新築設計図[所蔵:浜松市立中央図書館]

3

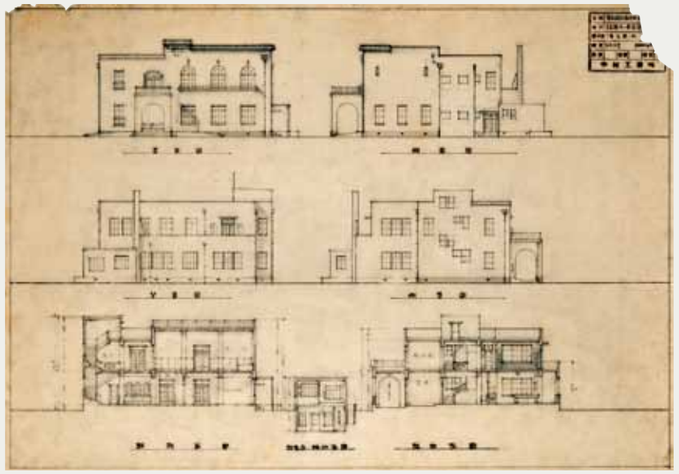


4

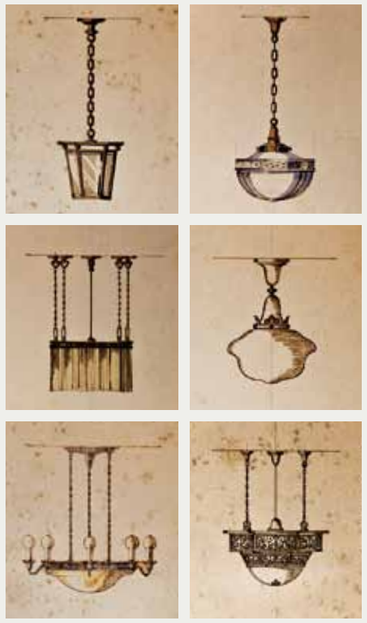
浜松銀行集会所

銀行集会所は、銀行の支店長など責任者が集まる情報交換の場であり、銀行間での手形交換を行う重要な場所でもある。浜松銀行集会所では、1階に手形交換室と社交場としての役割を担った球戯室、囲碁室、食堂がある。2階には講堂がある

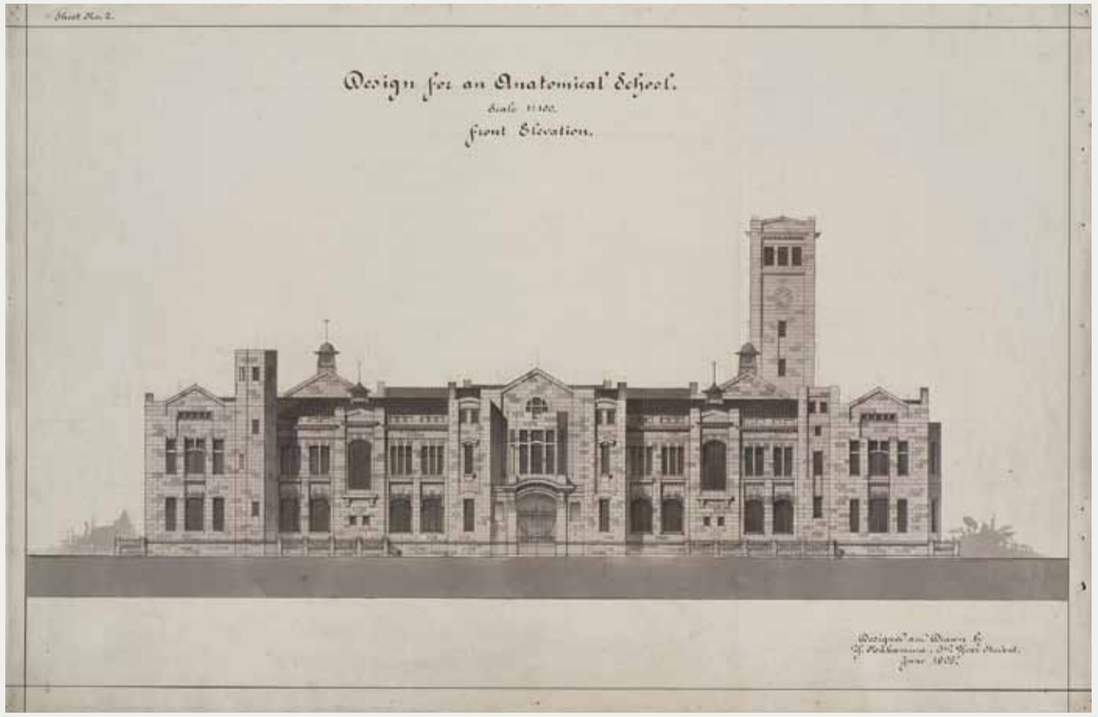
5——立面図及び断面図 | 6——照明見取図(左上から右に):ホール用/手形交換室及事務室用/食堂用/球戯室用/講堂中央用/貴賓室用[所蔵:浜松市立中央図書館]



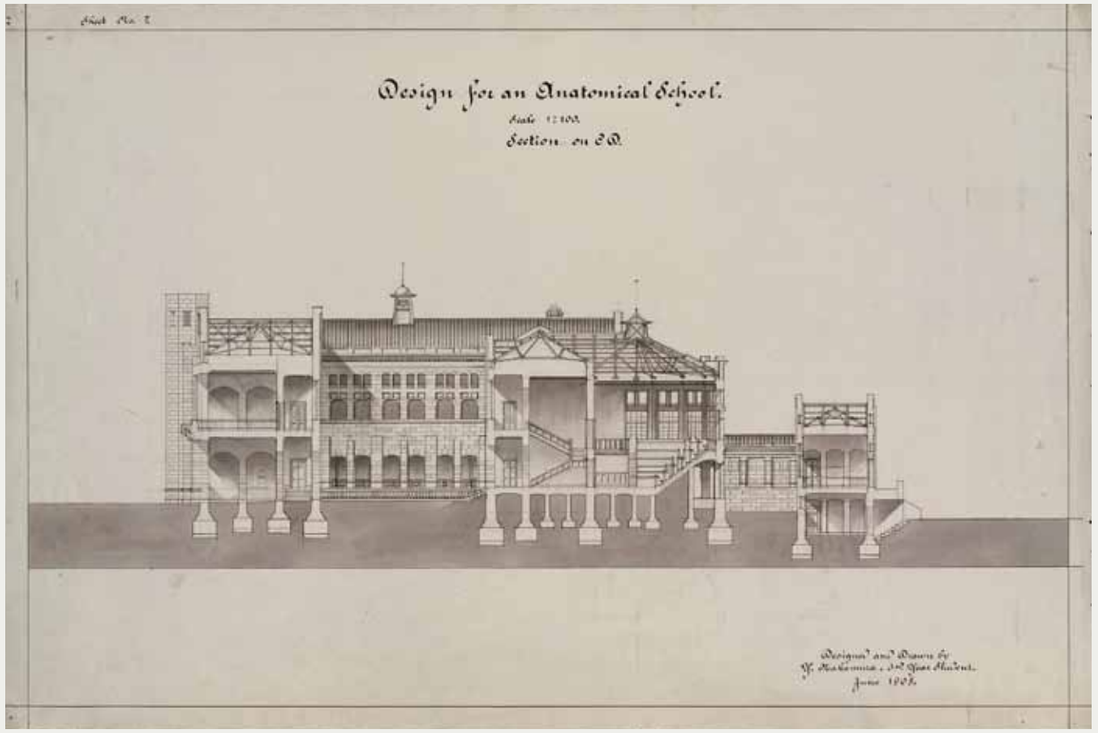
5



6



7



8

卒業設計「Design for an Anatomical School.」[1905]:建物は、レンガ造か石造の2階建て校舎である。これを見ると、1905年5人組の世代は、まだ、RC造を全く習っていなかった、と言える

7——Front Elevation | 8——Section on CD[所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

略歴 | Biography

明治13年[1880] 2月8日、中村貞一郎の長男として静岡県長上郡天王村(現・浜松市東区天王町)に生まれる
明治22年[1889] 下堀小学校卒業
明治26年[1893] 浜松高等小学校卒業
明治32年[1899] 浜松中学校卒業
明治35年[1902] 第三高等学校卒業
明治38年[1905] 7月、東京帝国大学建築学科卒業。卒業設計「Design for an Anatomical School」。卒業論文「Description for an Anatomical School」。卒業後、辰野葛西事務所入所
明治40年[1907] 12月、第一銀行韓国総支店(1911年、朝鮮銀行本店に改称)臨時建築部工務長に任命される
明治41年[1908] 住居を京城(ソウル)に移す
明治45年[1912] 1月、朝鮮銀行本店竣工。朝鮮銀行建築顧問となる。京城黄金町に中村建築事務所開設。朝鮮銀行からの報奨金5,000円で京城蓬莱町4丁目に自宅購入。岩崎徳松入所
大正3年[1914] 朝鮮銀行大阪支店新築工事にあたり、岩崎徳松を代理人として大阪に派遣
大正6年[1917] 大連市山県通りに出張所と工事部を開設。岩崎徳松を大連出張所主任、藤井嘉造を工事部主任とする。工事部と商事部を統合して日米公司設立。11月30日、東京書院より『美術的建築』を訳出
大正8年[1919] 4月、久留弘文大連出張所入所、同所主任。9月、宗像主一大連出張所入所。アントン・フェラー入所
大正9年[1920] 5月、フェラーを大連に派遣。12月25日、火災により京城の事務所焼失。事務所を京城太平町に移転
大正10年[1921] 3月25日、フェラーと共に米欧旅行に出発。旅行記を『満洲建築協会雑誌』に連載
大正11年[1922] 2月11日、米欧旅行から帰国。3月8日、朝鮮建築会副会長に選出される。4月、東京溜池に中村工務所開設。東京高円寺に転居。京城の事務所は岩崎徳松に任せる。大連出張所は宗像主一が引き継ぎ、中村宗像建築事務所となる。フェラーを米国建築事務所へ移籍させる
大正12年[1923] 9月1日、関東大震災により工務所建物崩壊。高円寺の自宅内に工務所移転
大正13年[1924] 5月20日、岩崎徳松死去により京城の事務所閉鎖。この年『都市公論』に都市計画の論文を8編投稿。この年から実践女子専門学校で住居の講義を開始(–昭和19年)
大正15年[1926] 設計部を新宿・第百銀行ビルに移転
昭和4年[1929] 設計部を丸ノ内・昭和ビルに移転
昭和6年[1931] 『米欧旅行記』2巻を作成
昭和8年[1933] 設計部を丸ノ内・三菱仲14号館に移転。児童科学教育協会設立
昭和9年[1934] 工事部廃止。設計部を高円寺の自宅内に移転、中村與資平建築事務所と改称
昭和12年[1937] 4月10日、『住居』を桜文書院より出版
昭和19年[1944] 事務所閉鎖、浜松に疎開
昭和27年[1952] 10月5日、静岡県教育委員選挙に当選
昭和31年[1956] 静岡県教育委員会副委員長に就任
昭和38年[1963] 12月21日、郷里で逝去(83歳)

主な作品 | Works | ※印は推定竣工年

明治44年[1911] 朝鮮銀行釜山支店(釜山)※
大正2年[1913] 善隣商業学校(京城)
大正4年[1915] 京城YMCA(京城)｜朝鮮銀行大阪支店(大阪)
大正5年[1916] 三越呉服店京城支店(京城)｜朝鮮銀行奉天支店(奉天)
大正6年[1917] 漢城銀行大田支店(大田)｜京城中央学校(–大正12年/京城)
大正7年[1918] 漢城銀行釜山支店(釜山)｜漢城銀行開城支店(開城)
大正8年[1919] 朝鮮殖産銀行本店(京城)｜京城公会堂(京城)｜三越呉服店大連支店増築(大連)
大正9年[1920] 第一銀行京城支店(京城)｜京城日報社(京城)｜漢城銀行東大門支店(京城)｜漢城銀行南大門支店(京城)｜漢城銀行大邱支店(大邱)｜淑明女学校(京城)｜朝鮮銀行大連支店(大連)｜朝鮮銀行長春支店(長春)｜開原公会堂(開原)
大正10年[1921] 漢城銀行平壌支店(平壌)｜韓一銀行本店(京城)｜天道教中央教会(京城)｜韓一銀行寛勲洞支店(京城)｜東洋拓殖木浦支店(木浦)
大正11年[1922] 朝鮮銀行大邱支店(大邱)※｜朝鮮銀行群山支店(群山)｜湖西銀行本店(光州)｜横浜正金銀行長春支店(長春)
大正13年[1924] 湖南銀行順天支店(順天)｜番町小学校(東京)
大正14年[1925] 関口台町小学校(東京)
大正15年[1926] 窪町小学校(東京)｜赤羽小学校(東京)｜金富小学校(東京)｜山川医院(東京)｜小宮邸(東京)｜李王家別邸(神奈川)※
昭和2年[1927] 浜松市公会堂(静岡)｜三十五銀行掛川支店(静岡)※｜三十五銀行三島支店(静岡)※｜誠心女子学校(静岡)
昭和3年[1928] 実践女学校記念館(東京)｜堤邸倉庫(東京)｜小田商店(東京)｜山田商店(東京)｜平塚邸(東京)
昭和4年[1929] 伊勢大商店(東京)｜中村半三郎商店(東京)｜沢田医院(東京)※｜石井邸(東京)｜鳥山邸(東京)｜遠州電気軌道旭町駅(静岡)
昭和5年[1930] 昭和銀行須田町支店(東京)※｜昭和銀行神保町支店(東京)※｜昭和銀行田所町支店(東京)※｜宗吾ビル(東京)｜浜松銀行集会所(静岡)
昭和6年[1931] 豊橋市公会堂(愛知)｜三十五銀行本店(静岡)
昭和7年[1932] 実践女学校寄宿舎(東京)
昭和8年[1933] 大東館ホテル(静岡)｜李王家那須別邸(栃木)
昭和9年[1934] 静岡市庁舎(静岡)
昭和10年[1935] 静岡市公会堂(静岡)｜済生会大阪病院(大阪)
昭和12年[1937] 静岡県庁舎(静岡)
昭和13年[1938] 李王家美術館(京城)｜淑明学園女子専門学校(京城)

竣工年未確認 朝鮮銀行羅南支店(羅南)｜十八銀行京城支店(京城)｜湖南銀行本店(公州)｜釜山商業銀行本店(釜山)｜三井物産京城支店(京城)｜京城メソジスト教会(京城)｜日本キリスト教会(京城)｜組合教会(京城)｜京城日報社釜山支局(釜山)｜朝鮮新聞本社(京城)｜新義州公会堂(新義州)｜平安南道物産陳列館(京城)｜朝鮮クラブ(京城)｜京城銀行集会所(京城)｜朝鮮織紐工場(永登浦)｜奉天公会堂(奉天)｜京城日報安東県支局(安東)｜実践女学校校舎(–昭和12年/東京)｜昭和銀行浅草支店(東京)｜昭和銀行新宿支店(東京)｜東洋生命保険会社(東京)｜大安生命保険会社(東京)｜金忠商店(東京)｜小松岡安佐藤共同ビル(東京)｜柿本病院(東京)｜阿部邸(東京)｜山田邸(東京)｜李鍵公邸(東京)｜三十五銀行興津支店(静岡)｜三十五銀行藤枝支店(静岡)｜三十五銀行島田支店(静岡)｜三十五銀行浜松支店(静岡)｜三十五銀行吉原支店(静岡)｜三十五銀行焼津支店(静岡)｜遠州銀行本店(静岡)｜遠江銀行本店(静岡)｜浜松商工会議所(静岡)｜静岡県茶業連合会議所(静岡)｜静岡県青年団佐野会館(静岡)｜藤相鉄道本社藤枝駅(静岡)｜鈴与商店(静岡)｜大東館旅館(静岡)｜北海道拓殖銀行根室支店(北海道)｜共立鉱山発電所(宮城)｜樋口医院(長野)

取材協力:浜松市/財団法人浜松市文化振興財団/財団法人豊橋文化振興財団/静岡市役所/浜松市立中央図書館
参考資料:『ドームをぬける蒼い風』[中村與資平展実行委員会/1989]/『海を渡った日本人建築家』西澤泰彦著[彰国社/1996]/『日本植民地建築論』西澤泰彦著[名古屋大学出版会/2008]
その他:特記のない写真は撮り下ろしです
次号予告:「INAX REPORT No.188」の「続・生き続ける建築」は渡辺節です